

Title	バスク語文学の翻訳振興政策：少数言語文学の国際的普及の可能性と課題
Sub Title	Translation promotion policies for Basque-language literature : potential and challenges of international projection of minority language literature
Author	金子, 奈美(Kaneko, Nami)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.54 (2022.) ,p.23- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20221231-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バスク語文学の翻訳振興政策

——少数言語文学の国際的普及の可能性と課題——

金子 奈美

1. はじめに

1.1. 本稿の趣旨

スペイン北部とフランス南西部に跨るバスク地方の固有語であるバスク語は、話者数が百万人に満たない少数言語である。現存するヨーロッパ最古の言語の一つとされるこの系統不明の孤立語は、スペイン語とフランス語という強大な国家語の狭間で衰退の一途を辿り、かつては消滅すら予言されていたが、1960年代以降に急激な言語復興の進展を経験した。それとともに、過去半世紀に著しい発展を遂げてきたのが、バスク語で書かれた文学（以下、バスク語文学）である。1990年代からは他の言語への翻訳が本格化し、今日では日本語を含む世界の50の言語で、何らかのバスク語文学作品を読むことができる¹⁾。こうして、いわば「世界文学化²⁾」を果たしてバスク内外に読者を持つようになった近年のバスク語文学は、「黄金時代」(Zaldúa 2017)とも称される活況ぶりを呈している。

本稿は、上記の流れにおいて、バスク語文学作品の他の言語への翻訳を促進しようとする政策が過去20年余りにわたって行なわれてきたことに着目し、その展開を明らかにしようとするものである。翻訳振興政策は、文学研究および翻訳研究で世界文学論とともに1990年代末から台頭してきた、文学作品の国際的流通への社会的アプローチにおいて、この数年で急速に活発化しつつある研究分野である (Heilbron & Sapiro 2018; McMartin 2019)。そもそも、翻訳政策 (translation policy) 一般——文化政策の一部として、言語政策や文化外交などとも関

1) バスク語文学作品の邦訳には、以下のようなものがある。キルメン・ウリベ『ビルバオ—ニューヨーク—ビルバオ』（拙訳、白水社、2012）、同『ムシェ 小さな英雄の物語』（拙訳、白水社、2015）、ベルナルド・アチャガ『オババコアック』（西村英一郎訳、中央公論新社、2004）、同『アコーディオン弾きの息子』（拙訳、新潮社、2020）、ベルナト・エチェバレ『バスク初文集』（萩尾生・吉田浩美訳、平凡社、2014）。

2) ダムロッシュ (2011) が論じるように、〈世界文学〉とは翻訳を介して国際的に流通する文学のことである。

連する³⁾——が理論的な議論の俎上に上がったのもごく近年のことであるが (Meylaerts 2011; González Núñez 2016), Montero Küpper (2016a: 54; 2016b: 22) による定義を敷衍するならば、本稿が考察の対象とする翻訳振興政策は、「文芸作品の翻訳出版の振興に関して公的機関が下す決定の、そしてそれにもとづく制度や活動の全般的な方針・目標」とひとまずは定義できるだろうか⁴⁾。なお、翻訳には、カザノヴァ (2002: 176-179) が呼ぶところの「入翻訳」(他の言語からの翻訳) と「出翻訳」(他の言語への翻訳) があるが、本稿では、ある文学の国際的普及に関わる後者の振興政策のみを扱う。

翻訳研究の文脈では、翻訳を言語やテキストのレベルにとどまらない社会的な実践として再定義した「社会学的転回」により、翻訳の生産から流通までの過程に関わるさまざまな行為主体と、彼らその過程において翻訳に及ぼす影響——翻訳されるテキストの選定、翻訳作業および出版において採用される方略、そして刊行された翻訳の流通の仕方などにおける——がかつてなく関心を集めるようになった (Wolf 2014: 10)。実際、翻訳には翻訳者ばかりでなく、出版社、作家、編集者、著作権エージェントといった出版産業を支える各種のアクターが関わるほか、世界各地で、国家をはじめとするさまざまな主体 (政府や関係省庁、国際機関、政府系機関、民間団体など) が翻訳の振興と普及に携わっている。

翻訳の振興・普及のために行なわれる事業として、もっとも伝統的なのは翻訳出版助成であるが、出版産業のグローバル化に伴い、その内容は、国際ブックフェアへの作家や出版関係者の派遣、世界各地の翻訳者や文芸出版関係者を招聘した交流プログラムの開催、翻訳推薦図書のリストや著作権取引のための情報を提供する Web サイトの作成・運営など、次第に多様化している。こうした事業は、一般的には、国家が関係省庁を通じて手がけているか、自国の言語と文化の対外普及を目的として創設された公的性格の強い機関 (日本では国際交流基金、フランスではアンステイテュ・フランセなど) によって行なわれていることが多い。

こうして各国が繰り広げる翻訳振興事業は、出版界では比較的良好に知られているにもかかわらず、その歴史が十分に研究されてこなかったが (Pablo Núñez 2017: 168), ヨーロッパでは第二次世界大戦後に徐々に普及したのち、1990年代から2000年代にかけてブームとも言える広がりを見せたとされる (Vimr 2022: 828-829)。近年、やはりヨーロッパを中心に増えつつある研究では、小国 (エストニア、オランダ、イスラエルなど) や、国家を持たないものの独自の言語文化的アイデンティティと一定の政治的権限 (自治権) を有する地域 (ベルギーのフラ

3) 言語政策との関係については Meylaerts & González Núñez (2018) を、文化外交と翻訳の関係については von Flotow (2018) を参照。

4) やや曖昧な表現にならざるを得ないのは、言語政策 (Swann 2004) にいくらか似て——あるいはそれ以上に——翻訳政策は常に法律等に明文化されているわけではなく、実際の決定や制度設計、活動のあり方などから間接的に見て取れるという場合も少なくないからである。こうした翻訳政策の概念および実態の複雑さや曖昧さについては、Meylaerts (2011) を参照。

ンダース、スペインのガリシアなど)の事例を分析したものが目立つ⁵⁾。本稿が取り上げるバスク語文学の翻訳振興政策は、スペインのバスク自治州のものであるため、後者の一例ということになる。

1.2. 少数言語文学にとっての翻訳振興政策の性質とその射程

ある文学の他の言語への翻訳を対象に行なわれる振興政策は、大国にとっては自らの文化を対外的に普及させ、自国の覇権や影響力を拡大する文化外交のツールであるが、周縁化された国や地域にとってはそれ以上の意味を持つ(Heilbron & Sapiro 2018: 184-185)。そもそも、世界のさまざまな言語間の不均衡な関係において、言語は政治的、経済的のみならず、文学的な価値によってもその地位を左右されるが、ある言語が帯びる文学的価値は、とりわけ翻訳と結びついている(カザノヴァ 2002: 37, 176-180)。他の言語に、それも〈世界文学〉においてより中心的な言語に翻訳されることは、文学的価値を認められた証であり、とりわけ周辺的な言語で書かれた文学の場合は、その存在が国際的に可視化されるための一歩となる。世界的にほとんど、あるいはまったく文学的とみなされてこなかった言語や国・地域にとって、それがいかに重要なことであるかは言うまでもない。さらに、歴史の浅い国や少数言語におけるように、固有の文学的伝統に乏しい文学は、自らの言語文化的アイデンティティを強化・確立するために、他者の認知を必要とする。外部からの評価は、自らの言語文化の価値の再評価と、自尊心の醸成をもたらし、その文学の存続と発展をより確かなものとするだろう(Manterola, 2014b: 180-181)。したがって、本稿で扱うバスク語文学のようなケースにおいて、他の言語への翻訳の振興は、当然ながら対外的なアピールを目的とするが、同時に当該の文学そのものの地位向上を目指し、その発展を支える重要な役割をも担うとすることができる(Castro & Linares, 2021: 804)。

翻訳振興政策は、主に経済的な支援を通じて翻訳の増加に寄与するとともに、市場の原理に介入するものである。この点においても、そもそも翻訳されにくい周縁的で知名度の低い言語や地域の文学は、手をこまねいていれば決して翻訳されないという可能性すらあるため、自分たちの側から世界の他の言語に向けて、積極的に翻訳を推進していかなければならない立場にある。他方、これはあらゆる国・地域の文学に共通することだが、市場の原理に委ねていれば、商業的成功の可能性が高いごく一部の作家や特定のジャンルばかりが翻訳されることになり、当該の文学の本来の姿や多様性が目標文化において伝わらず、ひいてはその文学を生み出す国・地域のきわめて偏ったイメージが形成されてしまう。こうした意味において、公的な翻訳振興政策は、商業的な観点からは翻訳されにくいものも含め、できるだけ多くの多様な作品が

5) Heilbron & Sapiro (2018), Loogus & van Doorslaer (2021), McMartin (2019), Montero Küpper (2016b)などを参照。

翻訳されるよう支援することで、文学作品の国際的流通における不均衡を積極的に是正しうる可能性を秘めているのである (Heilbron & Sapiro 2007: 100)。

さらに付記しておくべきは、翻訳振興政策が実際に出版され、流通することになる翻訳に及ぼしうる影響である。翻訳振興のために行なわれる事業には、先述のように翻訳出版助成（公募や推薦による）等があるが、その実施機関は、支援の対象となる翻訳に関する規定や選考・審査などを通じて、どんな作品が、誰によって、何語から何語に、どれだけ、どのように翻訳刊行されるかに一定の影響を及ぼしうる (Montero Küpper 2016b: 23)。ある文学の翻訳のすべてが公的な助成等の振興政策によって刊行されるわけではないので、限定的な影響ではあるが、もとの翻訳点数が少ない文学であればあるほど、その翻訳の傾向に与える影響は大きくなるだろう。また、逆の見方をすれば、翻訳振興の主体は、上述のような事業の制度設計や規定、評価基準などを通じて、暗にどのような翻訳が望ましく、推進されるべきかという彼らの考えを示しているものであり、同時に、世に出る翻訳をその基準のもとに一定程度方向づけたいという意志を表明している。したがって、翻訳振興を目的に実施されている事業の詳細を分析し、その特徴や経年的な変化を観察することによって、ある文学における翻訳振興政策の形成と変遷を浮かび上がらせることができるはずである。

そこで、本稿では、バスク語文学作品の他の言語への翻訳を振興するために過去の約 20 年に行なわれてきた一連の事業に関して、制度設計や規定、そして支援の対象となった翻訳のデータの経年的な分析を行ない、その背後にある翻訳振興政策の特徴と変遷について考察を試みる。ただし、そのためには、バスク語文学とその翻訳についての基本的な情報を確認しておくことが必要となる。

2. バスク語文学とその翻訳

2.1. バスク語

バスク語は、既に冒頭で述べたように、今日のスペインとフランスの国境に跨る地域で話されてきた系統不明の言語である。その領域は、歴史的に「バスク地方」——バスク語では、「バスク語のくに」を意味する Euskal Herria——と称されてきたが、独自の主権国家を形成したことはなく、現在は、スペインのバスク自治州（人口約 220 万人）とナバラ自治州（同約 64 万人）、フランス領バスク（同約 27 万人）に分かれて存在している⁶⁾。

バスク語は、かつてはこの地域で広く話されていたと見られるが、その地理的・社会的な使

6) 狭義の「バスク地方」はスペインのバスク自治州のみを指す場合もあるが (萩尾 2019: 80-82)、本稿が取り上げるバスク語文学は歴史的に今日のスペイン-フランス国境の両側で存在してきたため、ここでは政治・行政的ではなく言語文化的な観点から、これらの地域全体を「バスク地方」ないし「バスク」と呼ぶ。人口データは、2016 年の社会言語学調査 (Eusko Jaurlaritz 2019) に拠った。

用空間は縮小の一途を辿り、とりわけ 19 世紀後半から 20 世紀半ばにかけて急激に衰退した。その要因はさまざまだが、スペイン領バスクにおける工業化に伴う他の地域からのスペイン語話者の大量流入や、スペイン内戦後のフランコ独裁（1939～1975 年）におけるバスク語文化への激しい弾圧が特に知られている。しかし、1960 年代以降のバスク語復興運動の高揚と、1978 年のスペイン民主化後に発足したバスク自治州の全域とナバラ自治州の一部におけるバスク語の公用語化は、バスク語を取り巻く状況を大きく変え、次節で述べるように、文芸創作・出版を含む社会のさまざまな領域においてバスク語使用が拡大した。

とはいえ、言語復興が進展した現在でも、バスク語が少数言語であることに変わりはない。今日、スペイン側とフランス側でそれぞれの国家公用語が普及している一方、バスク語話者の割合は、2016 年の社会言語学調査（Eusko Jaurilaritza 2019）によればバスク全域で 28.4%（バスク自治州で 33.9%、ナバラ自治州で 12.9%、フランス領バスクで 20.5%）である。すなわち、バスク人口の圧倒的多数はスペイン語ないしフランス語の話者であり、バスク語を（ほとんど）解さない。それに対し、バスク語話者は基本的にスペイン語ないしフランス語とのバイリンガルであり、日常的に二言語を状況に応じて使い分けて生活している。

2.2. バスク語文学

このように、バスクではバスク語のみが使用されてきたわけではないので、バスク語以外の言語で表現された文化も当然ながら存在する。本稿では、そうしたバスクにおける、あるいはバスク人による文化ないし文学の総体を「バスク文化」、「バスク文学」と呼び、バスク語で表現された文化ないし文学（「バスク語文化」、「バスク語文学」）とは区別する⁷⁾。

バスク語はその歴史において、中世から一貫して、政治的・文化的威光や話者人口ではるかに強大な言語（古くはラテン語、のちにフランス語やスペイン語）とのダイグロシア状況に置かれてきた。そのため、文学（書記）表現には、もっぱらそれらの文化的・政治社会的ステータスの高い言語が用いられる一方、バスク語は長きにわたって民衆のオーラルな使用の領域に留まり、書き言葉としての発展が妨げられた。バスク語による識字教育や高等教育機関の欠如、義務教育における国家語の強制とバスク語の禁止、国家語以外での出版の制限や検閲といった諸要因により、そもそもバスク語で書き、出版するための条件を欠いてきたことから（Olaziregi 2012: 10-11）、1545 年にバスク語で書かれた最初の書物が出版されて以降、20 世紀半ばまでにバスク語で出版された本はきわめて少なく、しかも宗教書が大半を占めたため、厳密に文学作品とみなされるものはごくわずかであった【表 1】。

バスク語による文芸創作・出版のための条件がようやく整い始めたのは 1960 年代以降のことで、バスク語アカデミーによって標準語・正書法となる「共通バスク語」が提唱されたのが

7) 「バスク文学」の定義をめぐることは、Olaziregi (2012)、Gabilondo (2016)などを参照。

表 1. バスク語書籍の刊行点数の経年推移

刊行時期	16 世紀	17 世紀	18 世紀	19 世紀 前半	1850 ～1895	1896 ～1935	1936 ～1967	1968 ～1975	1976 ～1994	1995 ～2018
刊行点数	6	46	151	211	712	1019	818	915	12,525	47,660
年平均	0.06	0.46	1.51	4.22	15.4	25.4	25.5	114.3	659.2	1,985.8

Torrealdai (1997: 54-57) および Igartua & Zabaltza (2021: 80-81) をもとに作成。

1968 年、スペイン領バスクでバスク語が公用語化されたのが 1970 年代末から 1980 年代初頭にかけてである。特にバスク自治州では、バスク語が州全域においてスペイン語と並ぶ公用語の地位を得て、行政・司法・教育・文化・メディアといった社会のあらゆる領域におけるバスク語使用の拡大が推進された。その結果、1980 年代を通じて、学校教育におけるバスク語使用が本格化したほか、バスク語の出版物や作家への公的助成や各種文学賞の創設、大学におけるバスク語文献学部の設置、バスク語作家協会 (EIE) やバスク語翻訳者・通訳者・校正者協会 (EIZIE) の設立といった制度化が進んだ (Aldekoa 2004: 191-193)。こうした変化とともに、バスク語で書く作家が増えたのみならず、読者層と出版市場が急激に拡大し、1976 年には 200 点に満たなかったバスク語書籍の年間刊行点数は 1990 年に 1 千点を超え、2005 年には約 2 千点に達した⁸⁾。以上の歴史的経緯から、バスク語文学は、1960～80 年代にスペインのバスク自治州を中心に制度化され、今日に至るまで急激な発展を遂げた文学と特徴づけられる。

2.3. バスク語文学の翻訳

こうして 1960 年代以降に急速な発展を見たバスク語文学は、1980 年代末に転機を迎えた。ベルナルド・アチャガの『オババコアック』(Obabakoak, 1988) が、1989 年にスペイン国民文学賞 (小説部門) をバスク語作品として初めて受賞したことで一躍国際的な注目を集め、1990 年代にかけて欧米の主要言語に次々と翻訳されたのである。この出来事は、バスク語文学の歴史において、それ以前と以後を分かち決定的な出来事となり (Olaziregi 2010: 36)、バスク語の作家や読者、批評家たちにもきわめて大きなインパクトを持って受け止められた⁹⁾。

そうして 1990 年代以降、アチャガ作品とともに他の作家の作品も徐々に翻訳・紹介が進んでいき、それまではきわめてわずかだったバスク語文学の他の言語への翻訳が急増する【表 2】。2000 年代には平均して年間 50 点以上の作品が翻訳されるようになり、2010 年までには

8) Torrealdai (2007: 105) を参照。なお、2017～2020 年のデータによれば、この間のバスク語書籍の年間刊行点数は約 2,300 点、初版発行点数は 1,500～1,900 点の間を推移し、そのうちの約 30% を児童文学、約 13% を一般文学が占める (Eizagirre Gesalaga 2012-2020)。

9) バスク語日刊紙 *Berria* で 2013 年 6 月に『オババコアック』の刊行 25 周年を記念して組まれた連続特集記事 (Astiz 2013) が、その反響をさまざまな視点から掘り下げている。

表 2. バスク語文学作品の翻訳点数の経年推移

刊行時期	17 世紀	18 世紀	19 世紀	20 世紀 前半	1950 ～1959	1960 ～1969	1970 ～1979	1980 ～1989	1990 ～1999	2000 ～2010
刊行点数	2	0	20	11	5	6	11	56	245	562
年平均	0.06	0.46	1.51	0.22	0.5	0.6	1.1	5.6	24.5	51.1

Manterola (2014: 118-122) をもとに作成。

161 人の作家の 480 点の作品が翻訳されるに至った (Manterola 2014a: 118-143)。それ以降も翻訳の数は増え続けており、バスク大学がオンラインで公開している『バスク語文学翻訳目録¹⁰⁾』の最新のデータ (2021 年 3 月 1 日更新) によれば、これまでに 50 の目標言語で累計 1,700 点以上の翻訳が刊行されている。

こうした『オババコアック』以後の翻訳の急増は、バスク語文学の「国際化」(Astiz 2013; Olaziregi 2015) とも呼ばれ、バスクにおける関係者の翻訳に対する関心を大きく高めることとなった。かねてより、少数言語であるバスク語とバスク語文学の未来を確実にするためにはバスク語文学の対外普及が必要不可欠であると考えてきた関係者にとって、こうした状況の到来は悲願であったが (Olaziregi 2010: 36; Manterola 2014a: 64)、バスク語で書かれた文学が今や少数言語の限られた読者層だけに読まれるものではなくなったという新たな現実の表われとしてであれ (Zaldua 2012: 172)、あるいは国際的な可視性と威信を高め、世界の他の文学と比肩する存在になるためのツールとしてであれ (Olaziregi 2010: 36)、翻訳は、今日のバスク語文学をめぐる議論の焦点の一つとなっている。

3. バスク語文学の翻訳振興政策

3.1. バスク語文学の翻訳振興政策の概要

バスク語文学研究においては、2010 年代初頭から、他の言語への翻訳が本格的な分析と議論の対象となってきた。まずは先述の『バスク語文学翻訳目録』の作成と分析が行なわれ (Manterola 2014a; 2014b; 2016)、次いで、社会学的観点から、バスク語文学における翻訳の性質を、とりわけさまざまな行為主体の役割に着目することで掘り下げようとする研究が進展しつつある (Ibarluzea & Olaziregi 2016)。公的機関を主なアクターとする翻訳振興政策に注目した本稿は、その流れを踏まえたものである。

バスク語文学の翻訳振興政策について、その概要は先行研究のなかで時たま言及されているものの、一次資料の詳細かつ体系的な分析にもとづく評価はまだ行なわれていない。

10) Euskal Literatura Itzuliaren katalogoa (ELI): <https://www.ehu.eus/ehg/eli/>

まず、Olaziregi (2010: 36) が触れているように、バスク語文学の翻訳および対外普及に対する公的な助成が開始されたのは、バスク自治州において2000年のことで、Manterola (2014a: 120) は、これを州政府とバスク語作家協会の間で結ばれた合意にもとづくものだとしている。以降、バスク自治州政府文化省（当時）によって2011年まで、翻訳出版助成その他の振興事業（いずれも公募制）が行なわれたが、これらの事業には、明確な政策——どういった観点からどのような翻訳を促進しようとするのか——が見てとれないという批判があった (Manterola 2014a: 247-248)。

その後、2012年からは、バスク語とバスク文化の対外普及機関として設置されたエチェパレ・バスク・インスティテュート（以下、「エチェパレ」と略記）が、その活動の一環として旧文化省¹¹⁾ が担っていた上記の事業を引き継ぐとともに発展させながら、今日に至るまでバスク語文学の翻訳振興にあたっている¹²⁾。エチェパレの翻訳振興事業については、Olaziregi (2015: 534-535)、Ibarluzea & Olaziregi (2016: 198)、Manterola (2016: 197-199) にやや詳しい言及があるが、かつての州政府文化省の政策と比較してどのような変化が見られるのかは、まだ十分に掘り下げられていない¹³⁾。

2.2. で確認したように、バスク語文学の過去半世紀の発展において、1980年代に主にバスク自治州において実現したバスク語の公用語化と、バスク語の出版物や作家への助成等の施策がきわめて重要であったとすれば、1990年代以降のバスク語文学の翻訳の増加傾向（2.3.）においても、やはり公的な翻訳振興事業が一定の影響を持ってきたはずである。その開始から20年余りが経つ今日、これまでの一連の施策の全容とその変遷を把握し、過去の成果と今後の課題について考察する時期に来ているのではないかと考えられる。

3.2. 分析対象

このような状況に鑑み、本稿では次章以降、スペインのバスク自治州で行なわれてきたバスク語文学の一連の翻訳振興事業を、バスク自治州政府文化省によるもの（2000～2011年）と、エチェパレ・インスティテュートの事業（2012年～）とに分けて、経年的な分析と考察を行なう。分析の対象とする資料は以下である。

第一に、制度設計や規定といった観点から、翻訳出版助成等の事業の詳細を定めた文書（公

11) 2012年に教育・言語政策・文化省、2016年に文化・言語政策省と名称を変えた。

12) エチェパレ・インスティテュートの組織や活動全般については、萩尾（2012）および萩尾・長谷川・塚原・柿原（2015: 131-133）に詳しい。

13) なお、通時的ではなく共時的な研究としては、スペイン国内の三つの少数言語（バスク語、ガリシア語、カタルーニャ語）における2018年の文芸翻訳振興事業を比較したCastro & Linares (2021)の研究があり、示唆に富んでいる。Montero Küpper (2016)にも、バスク語を含むスペイン国内におけるさまざまな言語の翻訳振興政策の概要の比較が含まれている。

募要領に相当)の記述を分析する。特に、支援する対象と目的、予算、選考基準といった項目に着目し、これらの規定に何らかの修正や変更が生じている場合、その狙いや背景、当該の変更がもたらす影響について考察する。第二に、支援の対象に選定された翻訳のデータ(作品、翻訳者、出版社、目標言語など)を分析し、そこに見られる特徴について考察する。これらのデータは、主に翻訳振興事業の公募の選考結果を開示した文書から得ることができるが、公開されているデータの項目が常に同一ではないため、得られた情報で比較可能な範囲での分析となる。

分析に用いた資料は、バスク自治州政府文化省によって行なわれた事業については、州政府の官報(EHAA/BOPV¹⁴⁾)に公表された省令や決裁の文書である。エチェパレ・インスティテュートの手がける事業に関しては、初年度(2012年)のものは上記と同様に州政府の官報を、それ以降の年度は、エチェパレのHP(<https://www.etxepare.eus>)で公開されている各公募の要項と選考結果のリスト、年次報告書(2016～2021年)、その他の情報を活用し、必要に応じて事務局にデータの照会を行なった。さらに、関連団体であるバスク語翻訳者・校正者・通訳者協会(EIZIE)のHP(<https://eizie.eus>)の情報も参照した。

4. バスク自治州政府文化省の翻訳振興政策(2000～2011年)

4.1. 組織の概要と特徴

バスク自治州は、スペインの民主化と地方分権化を方向づけた1978年憲法のもと、1979年末に発布されたバスク自治州憲章にもとづいて成立し、翌1980年にバスク自治州政府(Eusko Jurlaritza / Gobierno Vasco)が発足した。先述のように、バスク語は州の固有語として、国家語のスペイン語と並ぶ公用語とされている。1982年のバスク語使用正常化基本法¹⁵⁾により、自治州政府をはじめとする州全域の公的機関は、それまで劣位に置かれてきたバスク語がその社会的機能や威信を回復するため、社会のあらゆる領域においてスペイン語と対等の使用を促進するために必要な手段・方策を取ることを定められている。

このような言語政策にもとづき、バスク自治州政府文化省(Kultura Saila、現在の文化・言語政策省)は1980年代から、バスク語の振興・普及と使用正常化のためのさまざまな施策を推し進めると同時に、バスク語書籍の出版助成、バスク語による文芸創作の奨励金などを通じて、バスク語文学の振興にも努めてきた(Torrealdai 1997: 480-487)。こうした経緯から、州政府文化省の翻訳振興政策は、1980年代に開始したバスク語文化振興政策の延長として位置づけることができる。

14) 以下のURLにデータベース化されている。<https://www.euskadi.eus/y22-bopv/eu/bopv2/datos/Azkena.shtml>

15) Azaroaren 24ko 10/1982 oinarrizko LEGEA, EHAA, 1982-12-16, 160 ZK.

ただし、こうして自治州のアイデンティティの根幹たるバスク語¹⁶⁾とその文化の振興に重きが置かれる一方で、バスク自治州政府文化省による文化政策は、バスク語文化だけでなく、州内のスペイン語文化も「バスク文化」とみなし、できるだけ同時に支援の対象とするという姿勢を取っており、これは翻訳振興政策においてもほぼ一貫している。実は、州政府文化省による翻訳振興事業も、のちのエチェバレによる同様の事業も、バスク語文学作品の他の言語への翻訳と対外普及を促進することを意図すると考えられるにもかかわらず(4.2.を参照)、振興の対象から、国家レベルのより規模の大きな支援を受けることのできるスペイン語作品を除外していない¹⁷⁾(ただし、スペイン語作品の場合はバスク自治州を出身地または居住地とする作家の作品に限られる)。自治州内でバスク語と併存するスペイン語の扱いは、以下の分析でも明らかになるように、バスク語文学の翻訳振興政策における一つの問題点となってきた。

4.2. 翻訳振興事業の前身

バスク自治州政府文化省による翻訳振興事業の先駆けとみなせるのが、1997年に設けられたエウスカディ賞(Euskadi Saria / Premio Euskadi)である。これは、バスクの優れた文学作品を表彰し、その社会的普及に寄与することを目的とした賞で、バスク語文学、スペイン語文学のほか、児童文学などさまざまな部門がある。それ以前から異なる名称と分野で存在していた文学賞を同一の名称のもとに統合したものだが、1997年の制度変更に伴い、バスク語文学部門の受賞作と次点作に関しては、「バスク語で書かれた文学の我々の領域外における伝播の困難」(Kultura Saila 1997)を理由として、賞金に加えて、他の言語への翻訳出版に対する助成金が副賞として与えられることになった¹⁸⁾。現在も続くこの制度の成り立ちから、バスク自治州における翻訳振興政策が、スペイン語作品よりも圧倒的に翻訳されにくく、対外的に認知されづらいバスク語文学への支援を意図して始まったことが確認できる。

4.3. 翻訳振興事業(2000～2011年)

その後、2000年に開始されたバスク自治州政府文化省による翻訳振興事業は、2011年までの間に、幾度かの制度的変更を経ながら行なわれた。その全般的な特徴は、翻訳出版助成と、州外における普及活動に対する助成が一緒に公募されたことである【表3】。

バスク自治州政府文化省は2000年、「バスク書籍の国際的プロモーションへの助成」を開始した。その規定と公募要領を定めた省令の序文では、「バスク書籍が近年到達した質を考慮す

16) 前述のバスク語使用正常化基本法の記述による。

17) 二言語共同公用体制の遵守とも言える姿勢であるが、スペイン国内で同じく少数言語の地位にあるガリシア語やカタルーニャ語にはその言語で書かれた文学のためだけの翻訳振興政策が存在するのと比較すると奇異に映る(Montero Küpper 2016a: 68)。

18) 2022年度の公募要項では、賞金1万8千ユーロ、副賞4千ユーロとなっている。

表 3. バスク自治州政府文化省による翻訳振興事業の制度的変遷

実施年	2000～2002	2003	2005～2010	2011
名称	バスク書籍の国際的プロモーションへの助成	バスク語出版およびバスク書籍の翻訳への助成	バスク書籍の翻訳に関わる活動への助成	同左
助成対象	①翻訳出版 ②国際ブックフェアへの参加 ③バスク自治州外におけるバスク文学の宣伝・普及活動	①バスク語出版 ②翻訳出版	①翻訳出版 ②翻訳見本作成 ③文芸翻訳者の養成活動 ④国際的なプロモーション活動	①翻訳出版 ②翻訳見本作成 ③文芸翻訳者の養成活動
予算	総額 1,450 万ペセタ / 87,146.76 ユーロ ① 300 万ペセタ / 18,030.36 ユーロ ② 1 千万ペセタ / 60,101.21 ユーロ ③ 150 万ペセタ / 9,015.18 ユーロ	総額 699,281 ユーロ ① 663,281 ユーロ ② 36,000 ユーロ	総額 116,205～125,000 ユーロ ① 73,000～82,000 ユーロ ② 12,000～17,000 ユーロ ③ 15,000～20,000 ユーロ ④ 5,000～10,000 ユーロ	総額 105,000 ユーロ ① 75,000 ユーロ ② 15,000 ユーロ ③ 15,000 ユーロ
備考		以下が別途公募された。 ・国際ブックフェアへの参加（予算 66,111 ユーロ） ・バスク自治州外における宣伝・普及活動の運営（予算 21,036 ユーロ）		

ると、バスクの作家によってバスク語およびスペイン語で書かれた作品が、他の地域の人々にも彼らの言語で読まれ、そうして我らの書籍生産がバスク自治州の外でも知られるようになることはきわめて重要である」とされ、「バスク文学を構成する作品を国際的に知らしめ、バスクの作家の主要な文学作品の普及を推進し、バスク文学の国際的評価を高める」ことが目的に掲げられた（Kultura Saila 2000a）。助成対象は、①翻訳出版（バスク語作品の他の言語への翻訳、およびバスク自治州のスペイン語作家の作品のバスク語以外の言語への翻訳の出版）と、②国際ブックフェアへの参加、③バスク自治州外におけるバスク文学の宣伝・普及活動であった。予算配分を見ると、翻訳出版助成の予算の3倍超が国際ブックフェアへの参加に充てられているが、そうした国際的な場でのプロモーションが意味を持つのは宣伝すべき翻訳（または翻訳されるべき作品を紹介するカタログや翻訳見本）があってこそなので、アンバランスであることは否めない。この公募事業は、予算の規模と配分を変えることなく3年続けて行なわれ、2001～2002年の選考結果は不明であるが、2000年度の助成対象となったプロジェクトの一覧（項目ごとに分かれていない）を見ると、翻訳出版と思しきプロジェクト5件のすべてをバスク自治州の出版社2社が担っている。つまり、少なくとも初年度に関しては、おそらく翻訳出版助成の全額が、バスク内の出版社によるバスク語作品のスペイン語訳の刊行に充てられたと見られる。この公開されている選考結果のリストには、翻訳出版と思しきプロジェクトに関して、出版社名に原書の著者名が併記されているが、翻訳者に関するデータはない。

その後、2003年に助成の制度的枠組みに変化が生じる。2000年の①～③のうち、②と③が

国際的プロモーションへの助成として別途募集され、かつ①の翻訳助成がバスク語出版助成とともに公募されたのである。翻訳助成の予算は倍増したものの、国際的プロモーションへの助成の額と比較するとまだ少額である。そして、この年も公募の選考結果は不明である。

翌2004年は公募が行なわれず、2005年になると、さらに制度の見直しが行なわれた。「バスク書籍の翻訳に関わる活動への助成」として、今回対象となったのは、①翻訳出版、②国際市場での翻訳権販売を目的とした翻訳見本作成、③文芸翻訳者の養成活動、④作家本人による国際的なプロモーション活動であった。予算の配分は、ようやく翻訳助成が大幅に増額される一方、国際プロモーションの額が低く抑えられた。その後、2010年から全体的に予算が削減されたのを除けば¹⁹⁾、2011年までほぼ同じ内容と予算規模による公募が続き、公募の選考結果も2011年分を除いて入手可能である。

4.4. 翻訳出版助成

バスク自治州政府文化省による翻訳振興事業の全体的な制度面の記述に次いで、翻訳に対する直接的な支援である翻訳出版助成について、情報が公開されている2000年と2005～2010年の公募の選考結果をもとに分析を行なう。

助成を受けた翻訳の点数を見ると、開始当初は応募がなかなか集まらなかったようである【表4】。その後、2005年以降は平均で年20点超が助成対象となり、翻訳される作品の著者や原題、原語といった情報の不足から断定はできないものの、その93.1%（計135点）がバスク語作品の翻訳であると推測される。2001～2004年のデータがなく、また公募と刊行の時期は異なるため、単純な比較はできないが、【表2】で示したように2000～2010年に刊行されたバスク語文学の翻訳点数が562点であるので、同時期にバスク自治州政府文化省の助成を受けた翻訳の数は、少なくともその4分の1を超えると考えられる。したがって、数量的には、翻訳出版助成が2000年代のバスク語文学の翻訳点数の急増に寄与したことはほぼ確実であろう。

一方、翻訳の目標言語に目を向けると、初年度の支援対象がすべてスペイン語への翻訳と推測されることは前節で言及したが、2005年以降は、年に3～9言語（バスク語作品の翻訳に限れば3～7言語）へ翻訳されている。目標言語の総数は14言語（バスク語作品の翻訳のみでは12言語）である【表5】。その内訳では、スペイン語への翻訳が圧倒的に多く、バスク語作品の翻訳の約72%を占める。また、バスクの出版社によるプロジェクトが多いことも特徴で、翻訳点数全体の半分以上を占めている【表4】。したがって、助成を受けた翻訳の大半が、バスク内で刊行されるスペイン語訳であったことになる。

バスク語文学の翻訳におけるスペイン語訳の多さは、のちに本格化したバスクの翻訳研究に

19) おそらく2009年のバスク自治州議会選挙により、自治州の発足以来初めて非バスク・ナショナリストのスペイン社会労働党（PSOE）が政権を取り、従来のバスク語文化政策に変化が生じたためではないかと考えられる（萩尾2012: 68）。

表 4. バスク自治州政府文化省による翻訳出版助成

年度	2000	2005	2006	2007	2008	2009	2010
予算執行率	不明	73.4%	80.8%	88.2%	93.9%	51.7%	124.6%
翻訳点数	5 (推定)	21	20	25	22	16	36
バスク語作品の数	5 (推定)	19 (推定)	19 (推定)	23 (推定)	21 (推定)	16	32 (推定)
目標言語の数 ^[1]	1 (推定)	7 (6)	5 (4)	6 (5)	6 (5)	3 (3)	9 (6)
スペイン語訳の割合 ^[2]	100% (推定)	61.9%	73.6%	73.9%	57.1%	75%	75%
バスクの出版社による翻訳出版の割合	100% (推定)	52.4%	60%	64%	50%	50%	58.3%
評価委員会のメンバー	・文化省文化遺産局長 ・自治州政府の公務員2名	・文化省創作・文化普及局長 ・文化省の公務員2名	同左	同左	同左	同左	同左
評価基準	・翻訳プロジェクトの価値 10% ・出版の技術的特徴(部数, 予算など), 翻訳の特徴および質保障 50% ・出版社の経歴と広報能力 40%	・作品および翻訳の内在的・社会的価値 40% ・出版社の経歴と広報能力 30% ・翻訳出版の技術的特徴(部数, 予算など) 30% ・評価点が50%に達さないプロジェクトは却下	同左	同左	同左	同左	同左

[1] 2005～2010年分の括弧内の数字は、スペイン語作品の翻訳と推測されるプロジェクトを除いた、バスク語作品の翻訳のみの目標言語の数。

[2] 翻訳点数全体ではなく、バスク語作品の翻訳に占める割合。

において指摘されており、2010年までに出版された翻訳の約47%にのぼる (Manterola 2014a: 133)。また、そうしたスペイン語訳は、マドリードやバルセロナをはじめとするスペイン各地で出版されることもあるが、スペイン語出版を手がけるスペイン領バスクの出版社(場合によってはバスク語の原書と同じ版元)から刊行されることも少なくない。助成の支援対象においては、その傾向がより強く出ていることが見てとれる。

なお、公募の選考方法について補足すると、選考を行なう評価委員会のメンバーは全員、州政府(主に文化省)から出されており、文学や翻訳の専門家は含まれていない【表4】。選考基準に関しては、出版の観点からの評価が主となっており、翻訳者の経歴や試訳の質などは評価対象に入っていない。選考結果を公表する文書にも翻訳者の名前が一切含まれていないことから、旧文化省による翻訳出版助成においては、翻訳が誰によってどのように行なわれるのかという点はあまり重視されていなかったものと考えられる。

表 5. バスク自治州政府文化省による翻訳出版助成における目標言語 ^[1]

	2000	2005	2006	2007	2008	2009	2010	計
スペイン語	5(推定)	13	14	17	12	12	24	97
ロシア語	0	2	0	2	2	3	3 (2)	12 (10)
ドイツ語	0	0	3	2	2	0	2	9
イタリア語	0	1 (0)	1	2	4	0	0	8 (7)
フランス語	0	2 (1)	0	0	1 (0)	0	0	3 (1)
ポルトガル語	0	0	0	2 (0)	0	0	1 (0)	3 (0)
英語	0	1	1	0	0	0	0	2
オランダ語	0	0	0	0	0	0	2	2
グルジア語	0	0	0	0	0	0	2	2
ハンガリー語	0	1	1 (0)	0	0	0	0	2 (1)
カタルーニャ語	0	1	0	0	0	0	0	1
ブルガリア語	0	0	0	0	1	0	0	1
ルーマニア語	0	0	0	0	0	1	0	1
アラビア語	0	0	0	0	0	0	1 (0)	1 (0)
英語・フランス語	0	0	0	0	0	0	1 (0)	1 (0)

[1] 括弧内の数字は、スペイン語作品の翻訳と推測されるプロジェクトを除いた、バスク語作品の翻訳のみの数。

4.5. その他の関連事業

さらに、バスク自治州政府文化省によって翻訳出版助成とともに行なわれた他の関連事業について記述する。

当初、翻訳出版助成をはるかに上回る予算が充てられていた国際的な普及活動については、毎年4件程度の企画が助成され、国際ブックフェアへの参加やスペイン国内外での宣伝イベントの開催に充てられたと見られるが、その効果のほどは不明である。

2005年から導入された国際市場での翻訳権販売を目的とした翻訳見本作成への助成に関しては、特筆すべきは、バスク語文学ポータルサイト basqueliterature.com の充実が図られたことである。このサイトでは、英語、スペイン語など複数の言語で、バスク語文学の歴史などの基本情報のほか、代表的な作家の作品がその翻訳とともに紹介されていた。翻訳見本作成への助成が行われていた間、バスク語翻訳者・通訳者・校正者協会 (EIZIE) が支援を受け、同サイト向けに、主に英語への翻訳見本の作成を集中的に行なった。それまでは類似のサイトが存在しなかったため、basqueliterature.com がネット空間におけるバスク語文学の可視化と対外普及に果たした役割は小さくなかったと思われる ²⁰⁾。

20) 残念ながら、現在はアクセスすることができない。5.4.~5.5.を参照。

同じく 2005 年から行なわれた文芸翻訳者の養成活動への助成では、ここでも EIZIE が主な受益者となった。EIZIE は 2004 年から、バスク語から他の言語への文芸翻訳者を養成するために、毎年ある作品を選び、作家と翻訳者数名を招いての翻訳ワークショップを開催しており、この活動が助成の対象となったのである。ワークショップにはヨーロッパの大きささまざまな言語の翻訳者が参加し、その成果は EIZIE によって出版された²¹⁾。10 年以上続いたこのワークショップでは、翻訳作業の媒介言語としてスペイン語も使用されたが、バスク語からの直接翻訳も多数行なわれ、バスク語作品の翻訳においてまだ珍しかった直接翻訳の促進の先駆けとなった²²⁾。

4.6. 評価

以上の分析から、まず、バスク自治州政府文化省による 2000～2011 年の翻訳振興政策は、制度上はバスク語作品だけでなくスペイン語作品も対象としたものの、実質的にバスク語文学の翻訳振興の役割を果たし、同時期の翻訳点数の増加に寄与したという点は評価できる。しかし、翻訳出版助成の成果を見ると、数を増やすという以上の明確な政策が存在していたかは疑問であり、特にバスクの出版社によるスペイン語訳の出版が助成対象の大部分を占めたという結果からは、目的とされていた対外普及に効果的であったとはみなしにくい。むしろ、バスク語文学の翻訳において既に顕在化していた目標言語の偏り（スペイン語への偏重、依存）を助長してしまった可能性もあると思われる。

のちの研究の進展によって警鐘が鳴らされるようになったが、バスク語文学にとって、他の言語への翻訳のなかでスペイン語訳が突出して増えることは、両刃の剣である（Manterola 2014b: 181-182）。スペインのバスク自治州を中心に発展してきた今日のバスク語文学にとって、隣接するスペイン語に翻訳されることは対外的な普及のための第一歩とはなるが、対内的には、スペイン語書籍が少数言語であるバスク語の書籍よりも大量に流通する環境において、バスク語作品の多くがスペイン語でもすぐ刊行されるという状況が常態化した場合、もともと少ないバスク語の読者がより読み慣れたスペイン語で読むことを選択し、バスク語原書の読者が減ってしまう可能性すらある。また他方で、バスク語文学のスペイン語訳はしばしば、スペイン国内であたかも原書であるかのように——はじめからスペイン語で書かれた作品であるかのように——流通し²³⁾、それが他の言語に重訳された結果、目標文化においてスペイン（語）文学作品として受容されていることがある。しかしそれでは、国際的に普及したとしても、バ

21) EIZIE の HP にある同プログラムのページから、電子版をダウンロードすることもできる。
https://eizie.eus/eu/jarduerak/euskal-literatura-beste-hizkuntzetan/idazlea_eta_itultzailak

22) このワークショップの後継プログラムについては、5.4. で言及する。

23) スペイン文学がスペイン国内の少数言語文学を翻訳を通じて「領有」する傾向については、Dasilva (2009: 146) を参照。

スク語で書かれた原書の存在は陰に追いやられ、作家と作品の言語文化的アイデンティティは損なわれてしまう。だからこそ、バスク語文学はスペイン語ばかりにでなく、他のさまざまな言語に、できることならばバスク語から直接翻訳されることが望ましいのである。

2011年までのバスク自治州政府文化省の翻訳振興事業においては、少数言語であるバスク語に特有のこうした問題が政策的に考慮されていたとは考えにくく、民間の専門団体であるEIZIEのイニシアティブによるバスク語文学ポータルサイトの充実や翻訳者養成といった活動が、政策の穴を埋めるかたちで機能したと言える。そして、政策および制度の改善という課題が残されることとなった。

5. エチェパレ・インスティテュートの活動における翻訳振興政策（2012年～）

5.1. 組織の概要と特徴

バスク自治州政府文化省の翻訳振興事業を2012年から引き継いだエチェパレ・バスク・インスティテュート（Etxepare Euskal Institutua / Instituto Vasco Etxepare / Etxepare Basque Institute）は、バスク語とバスク文化の対外普及を目的とするバスク自治州の公的機関である。州政府により2007年に設置法²⁴⁾が公布されたのち、長い準備期間を経て、2010年秋から本格的な活動を開始した。現在は文化・言語政策省（旧文化省）の管轄下にある。このような体制下で、エチェパレは設置目的にもとづいて事業計画を立案・実施する立場にあり、その事業計画は文化・言語政策省大臣をトップとする評議会の承認のもとに行なわれるため、エチェパレの活動における翻訳振興政策は、州政府同省とのあいだで調整され、形成されたものとみなすことができるだろう²⁵⁾。なお、旧文化省の翻訳振興政策はバスク語文化振興政策の延長にあったことを4.1.で指摘したが、エチェパレへの事業の移管により、バスク自治州における翻訳振興政策は、より明確に対外政策として位置づけられることになった。

エチェパレ・インスティテュートの名称は、1545年に出版されたバスク語最初の書物『バスク初文集』の著者ベルナト・エチェパレ（Bernat Etxepare）に由来する。それまで印刷されたことのなかったバスク語が、世界に広まり他のさまざまな言語と比肩する存在になることを願い、「バスク語よ、世界に出でよ」と謳い上げた彼の詩句は、組織のモットーとして使用されている。

翻訳振興の観点からさらに指摘しておくべきは、エチェパレの発足当時から2016年まで、バスク語・バスク文化部門局長を務めたマリ・ホセ・オラシレギ（Mari Jose Olaziregi）の存在である。バスク語文学研究の第一人者として国際的に活動してきたオラシレギは、4.5.で言

24) 3/2007 LEGEA, apirilaren 20koa, Etxepare Euskal Institutua / Basque Institute Sortzeko eta Arautzekoa. EHAA, 2007-5-10, 89 ZK.

25) エチェパレ・インスティテュートの組織については、萩尾（2012）およびHPを参照。

及した basqueliterature.com の作成者の一人でもあり、当時まだ研究され始めたばかりのバスク語文学の翻訳の状況を熟知していた。2016 年以降、組織上層部の顔ぶれは変わったが、オラシレギが専門家として、今日に至るエチェパレの活動における翻訳振興政策をある程度方向づけたことは確かだろう。

5.2. 翻訳振興事業（2012 年～）

エチェパレ・インスティテュートによる翻訳振興事業は、基本的に旧文化省の事業の制度を継承するかたちで開始されたが、大きな変更点は、以前は翻訳出版助成や国際的プロモーションその他の助成と一緒に公募されていたのに対し、項目別に公募がなされるようになったことである。バスク語文学の翻訳の振興・普及に関係する事業は、翻訳出版助成と、バスク外への国際的なプロモーション活動への助成の二本立てとなり、後者は、旧文化省によって実施されていた国際ブックフェアへの参加と作家による国際的なプロモーション活動への助成の後継であるが、文学以外の分野（造形・視覚芸術、音楽、舞台芸術）への助成も含んでいるため、制度の比較が難しい。そのため、以下では、まず翻訳出版助成の制度と成果を直近の 2021 年度分まで分析し、その後、2015 年以降に登場したその他の関連事業を取り上げる。

5.3. 翻訳出版助成（2012 ～ 2021 年）

エチェパレ・インスティテュートによる翻訳出版助成は、旧文化省による助成と同じく、バスク語作品の他の言語への翻訳と、バスク自治州のスペイン語作家の作品のバスク語以外の言語への翻訳を対象としている。ただし、実際に助成対象となる作品のほとんどがバスク語作品であることも同様で、実質的にバスク語文学の翻訳振興事業として機能していると言える。

翻訳出版助成に充てられた予算は 2012 年から 2013 年にかけて、旧制度と比較するとほぼ半額にまで削減された【表 6】。これは、リーマンショック後にスペインに波及した経済危機に伴う財政難が理由と考えられる。その後、同規模の予算で 2019 年まで公募が続けられたが、2020 年から、コロナ禍の影響で国際的な移動に支障が出たことにより、対外的プロモーションの予算の大部分が翻訳出版助成に振り分けられ、予算が倍増した。その結果、現在の予算規模は旧文化省による翻訳出版助成の規模に近づいている。

助成を受けた翻訳の点数は、そうした予算の変動から、年間 14 ～ 28 点と幅の開きがあるが、バスク語作品は平均してほぼ 9 割を占め、10 年間で計 165 点となっている。目標言語の数を見ると、バスク語文学に関しては年に 5 ～ 13 言語に翻訳されている。目標言語の総数は 30 言語で、2011 年以前と比較すると、中東欧および北欧の言語が大幅に増えるとともに、アジア・アフリカの言語も加わり、かなり多様化している【表 7】。また同時に、バスク語作品の翻訳においてスペイン語への翻訳が占める割合が、分析対象とした期間全体で 43% と、以前の 72% から激減している。それに伴い、バスクの出版社によるプロジェクトの割合もかなり縮小し

表6. エチエパレ・インスティテュートによる翻訳出版助成

年度	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
予算(ユーロ)	44,000	39,000	同左	同左	同左	同左	同左	同左	64,000	同左
予算執行率	100%	100%	92.2%	100%	100%	59%	90.7%	90.6%	74.7%	74.4%
翻訳点数	24	17	16	18	17	14	15	14	28	21
バスケット作品の数	20	14	14	16	15	14	14	13	25	20
目標言語の数 ^[1]	11 (10)	11 (9)	6 (4)	12 (11)	7 (5)	7 (7)	9 (8)	8 (7)	13 (13)	14 (13)
スペイン語訳の割合 ^[2]	35%	28.6%	78.6%	12.5%	46.7%	35.7%	50%	46.7%	16%	25%
バスケットの出版社による翻訳出版の割合	25%	29%	75%	17%	18%	43%	47%	36%	7%	23.8%
評価委員会のメンバー	<ul style="list-style-type: none"> エチエパレ事務局長 エチエパレの担当部局長 該当分野の専門家と行政職員3~5名 エチエパレの職員(書記) 	同左	同左	同左	同左	<ul style="list-style-type: none"> エチエパレの担当部局長 該当分野の専門家と行政職員3~5名 エチエパレの職員(書記) 	同左	同左	同左	
評価基準	<ul style="list-style-type: none"> 原作の文学的価値 30% 翻訳の質 25% 翻訳者の経歴 20% 出版社の経歴や広報能力 20% 翻訳出版の技術的特徴(部数、予算など) 5% 評価点が50%に達さないプロジェクトは却下 	<ul style="list-style-type: none"> 変更点 翻訳者の経歴 15% 原作からの翻訳 5% 	変更なし	<ul style="list-style-type: none"> 変更点 翻訳の評価が50%未満の場合も申請却下 	変更なし	<ul style="list-style-type: none"> 変更点 出版社の経歴や広報能力 15% バスケット作品の場合、原作からの翻訳 10% 	変更なし	<ul style="list-style-type: none"> 変更点 翻訳または出版社の評価が50%未満の場合、申請却下 	変更なし	

[1] 括弧内は、スペイン語作品の翻訳と推測されるプロジェクトを除いた、バスケット作品の翻訳のみの目標言語の数。

[2] 翻訳点数全体ではなく、バスケット作品の翻訳に占める割合。

表7. エチエバレ・インスティテュートによる翻訳出版助成における目標言語^[1]

	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	計
スペイン語	7	4	11	2	7	5	7	7	4	5	71
英語	0	1	1	3	0	1	0	1	5	2	19
カタルーニャ語	1	1	1	3	2	1	1	1	5	2	18
イタリア語	0	4 (3)	0	0	3	4	0	0	0	1 (0)	12 (10)
ブルガリア語	2	1 (0)	1 (0)	2 (1)	1	0	1	1	1	1	11 (8)
スロベニア語	1	1	1 (0)	0	2	1	1	0	2 (1)	1	10 (8)
フランス語	4 (0)	0	0	1	0	1	1 (0)	0	2 (1)	0	9 (3)
セルビア語	0	0	0	1	0	0	1	1	1	2	6
アルバニア語	1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	4
アラビア語	0	0	0	0	0	0	0	1	2 (1)	1	4 (3)
ドイツ語	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3
ガリシア語	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	3
デンマーク語	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	3
日本語	1	1	0	0	0	0	0	1	0	0	3
ギリシャ語	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2
ポーランド語	0	1	0	1 (0)	0	0	0	0	0	0	2 (1)
マケドニア語	0	0	0	0	1 (0)	1	0	0	0	0	2 (1)
アムハラ語	0	0	0	1	1 (0)	0	0	0	0	0	2 (1)
ロシア語	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ポルトガル語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
アラゴン語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
オランダ語	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
グルジア語	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
チェコ語	0	1 (0)	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ウクライナ語	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
リトアニア語	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
ハンガリー語	0	0	0	0	0	0	0	1 (0)	0	0	1
アルメニア語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
フィンランド語	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
中国語	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1

[1] 括弧内は、スペイン語作品の翻訳と推測されるプロジェクトを除いた、バスク語作品の翻訳のみの数。

ており、バスク語文学の対外普及と国際化の進展が実感される。

公募の選考方法については、期間全体を通じて、細かな変更と修正が繰り返されており、制度の改善が進んでいることを示している。指摘すべき点が多いが、特筆すべきは、翻訳者と翻訳の質、そしてバスク語からの直接翻訳を重視する姿勢が当初から打ち出され、それに伴って申請者の資格、評価委員会の構成、評価基準などに重要な変更が加えられたことである。

まず、以前は原則として出版社を対象にした公募が行なわれていたが、エチェパレによる助成の初年度から、翻訳者個人による申請も可能になった。バスク語文学のような周縁的な文学の場合、出版社よりも翻訳者のイニシアティブによって翻訳の企画が進められることが多いため、この変更は申請の増加に効果的であったと思われる。また、申請する際の提出物にも変更があり、翻訳する作品の試訳の提出が義務づけられた。それとともに、評価基準において、翻訳の質が重視されるようになったほか、同じく以前は考慮されていなかった翻訳者の経歴も評価対象に加えられた【表6】。そして、評価基準だけでなく、評価委員会の構成にも変更が生じている。メンバーの人数が増やされ、エチェパレからの代表と職員、バスク自治州の公務員のほかに、エチェパレ事務局長の指名する専門家が含まれるようになった。この変更により、例えば EIZIE に所属する翻訳家や翻訳研究者が、応募された翻訳を専門的な観点から評価することが可能になった。

さらに、やはり2012年からの変化として、新たに原語（バスク語）からの直接翻訳を優先する方針が公募要項に明記されるようになった。のちに、評価基準にも変更が追加され、バスク語作品の原作からの直接翻訳には5～10%の加点がされるようになっている。また、2015年からは試訳が一定のレベルに達していない申請は排除される規定が設けられ、翻訳の質の評価がより厳格化された。

そして、【表6】に記載していないその他の変化を補足すると、2016～2017年に、同一作品の申請件数、翻訳1点あたりの助成金額、同一の申請者が受給できる助成の総額に上限が設けられ、より多くの作品・申請者に機会が与えられるための制度改善がなされた。さらに2020～2021年には、申請者の資格に新たな規定が加えられ、スペイン語への翻訳で、申請者が出版社の場合、本社がバスク自治州外にあることが条件とされた。これは、旧文化省の翻訳出版助成において顕著だった、バスクの出版社によるスペイン語訳の申請の過多を防ぐ仕組みとなっている。

以上から、エチェパレによる翻訳出版助成は、限られた予算にもかかわらず（あるいはそれゆえに）、バスク語文学のより効果的な翻訳振興のために、文芸翻訳出版の専門家の知見を取り入れながら、旧文化省による事業が残した課題を考慮した制度改善に取り組み、翻訳の質の向上、目標言語の多様化、そしてバスク語からの直接翻訳を推進する政策を打ち出してきたと評価することができる。

5.4. その他の関連事業

エチェパレ・インスティテュートは近年、バスク語文学の翻訳振興をさらに推し進めるための新たな取り組みを展開している。なかでも、先述した翻訳者と翻訳の質、そしてバスク語からの直接翻訳を重視する姿勢が現われているいくつかの事業が目される。

2015年、エチェパレは、バスク自治州の労働信用金庫ラボラル・クチャとともに、バスク語文学の優れた翻訳を表彰する「エチェパレ＝ラボラル・クチャ翻訳賞」を創設した。この賞は、翻訳者と出版社の双方に与えられ、翻訳の質はもちろん、出版社の広報戦略をも評価するもので、評価基準においてはさらに、バスク語からの直接翻訳であることが重視されている。これまでにガリシア語、日本語、ウクライナ語、英語、カタルーニャ語、スペイン語、オランダ語への翻訳が受賞している。

そして2016年には、EIZIEの協力のもと、バスク語からの世界各地の言語への文芸翻訳者を養成するプログラム“*Itzultzaile Berriak*”（バスク語で「新たな翻訳者たち」の意）が立ち上げられた²⁶⁾。バスク自治州の都市ドノスティア＝サンセバスティアンの欧州文化都市としての文化プログラムの一環で行なわれた初年度は、8名の翻訳者が公募され、バスク語に馴染みがない半数の翻訳者は半年間、バスク語の初歩～中級程度の知識を持つ残りの半数は1か月間バスク自治州に滞在し、バスク語の集中講座を受講しながら、EIZIEが企画するバスク語作家を交えたワークショップに参加し、その作家の作品の翻訳に取り組む機会が与えられることになった。

5.5. で言及したEIZIEの翻訳ワークショップの発展形と言えるこのプログラムには、ロシア・中東欧から計8名が参加し、半年間バスクに滞在した翻訳者たちにはさらに、バスク語文学作品を一作選んでスペイン語以外の言語に訳し、刊行するための助成金が与えられた。2021～22年には、プログラム第二弾としてケベックの翻訳者2名が、EIZIEのメンバーの指導のもと、バスク語作品のフランス語への翻訳に取り組んだ²⁷⁾。なお、「新たな翻訳者たち」の初回の参加者たちは、プログラム終了後もバスク語文学の翻訳を継続しながら、エチェパレの支援を受けてEIZIEとともに自国（スロベニア、ポーランドなど）でのイベント開催などの活動も行なっている。このように、翻訳者に直接支援を行なうことでネットワークが形成され、バスク語からの文芸翻訳とともにバスク語文学の対外普及も進んでいく。この効果的なプログラムは、今後も継続が期待される。

エチェパレは、上に言及した以外にも、バスク語文学作品のカタログやアンソロジーなどを

26) 以下のEIZIEのサイトを参照。https://eizie.eus/eu/jarduerak/euskal-literatura-beste-hizkuntzetan/itzultzaile_berriak

27) コロナ禍により期間が延長されたが、作家とのワークショップはオンラインで行なわれ、その成果は2022年3月にビルバオで開催された国際文芸フェスティバルGutun Zuriaにて披露された。

多言語版で発行するといった活動も行なっている²⁸⁾。

5.5. 評価

以上の分析から、全般的に、エチェパレはバスク自治州政府文化省の翻訳振興政策が残した課題を、とりわけ制度面の改善において克服しつつあると評価できる。まず、旧制度においては疑問符のついた翻訳出版助成の対外的効果が改善されたほか、先述のように、翻訳者を重視する姿勢を打ち出し、翻訳の質の向上、目標言語の多様化、そしてバスク語からの直接翻訳を推進する政策を確立した意義はきわめて大きい。また、バスク語翻訳の専門団体である EIZIE との連携を深めつつ、バスク外の各地の翻訳者たちとのネットワークを広げることで、バスク語から直接翻訳することのできる人材の養成のみならず、バスク語文学の対外普及においても相乗効果を生んでいる。

ただし、エチェパレの事業における政策にも課題がないわけではない。翻訳の目標言語の多様化については、ある程度実現されつつあるが、ヨーロッパの小言語への翻訳が大きく増加した一方、英語やフランス語といった主要言語への翻訳がまだ圧倒的に少なく、欧米以外の言語への広がりにも欠けている。その点を意識してか、2020年からは、バスク語文学作品の国際的な翻訳権販売を促進するためのカタログ制作を目的として、英語とフランス語の翻訳見本の公募が始まった。スペイン語以外の大言語への翻訳を促進するとともに、さらにそれらの言語を通じた他の言語への普及も狙う試みと考えられる。可能ならば、それに加えて翻訳ワークショップの参加者を欧米以外からも募るような仕組みも有効だろう。

また、旧文化省の翻訳振興政策の間接的な成果であった、インターネット空間を活用したバスク語文学の対外普及は、エチェパレの事業において不足している点である。エチェパレは、その活動全般においては、経費削減のためにもインターネットを介して世界各地と繋がる試みを活発に行なっているが（萩尾ほか 2015：133）、翻訳の振興・普及の分野では、4.5. で言及した basqueliterature.com という充実したバスク語文学ポータルサイトの遺産を生かすことができていない。旧文化省による翻訳振興事業がエチェパレに移管された際、basqueliterature.com の運営もエチェパレに渡り、サイトは組織の HP に組み込まれるかたちとなったのだが、その後、エチェパレの HP がリニューアルを重ねるうちにアクセス不能となっている。その一方で、2019年にはバスク語とバスク文化を総合的に紹介する新たなポータルサイト basqueculture.eus が開設されたが、そこでは、バスク語文学が他の分野の文化のなかに埋没してしまっているうえ、掲載内容は関連団体へのリンクが主で、ワンストップで情報が入手できる仕組みになっていない。今後サイトの拡充が図られていくかは注視していく必要があるが、

28) エチェパレの HP から電子版をダウンロードすることができる。<https://www.etxepare.eus/eu/euskal-literatura>

他の少なからぬ文学の翻訳振興において行なわれているように、翻訳されるに値する作家や作品の情報をできるかぎり集約し、外部からアクセスしやすいかたちで、より積極的に提供していくべきだろう。

そして最後に、EIZIE との連携によって効果が確認された民間団体との協力であるが、バスク語文学作品の翻訳権の売買を促進していくためには、国際的な著作権エージェンシーへのアプローチが考えられる。著作権エージェンシーは、出版社からの依頼で翻訳権の売買を手がけるだけでなく、翻訳されるべき作品を各国の出版社向けに提案するといった媒介の役割を果たしており、グローバル化した文学市場においてますますその重要性を高めている。バスクにおける著作権エージェントの欠如はかねてより指摘されており (Urkiizu 2000: 540)、近年では翻訳の増加に伴ってバスク外の著作権エージェンシーと契約する作家が増えつつある²⁹⁾。そこで、例えば、主要な著作権エージェンシーをバスクに招いてバスク語文学への理解を深めてもらったり、国際ブックフェアやその他の対外的プロモーションの場におけるイベント開催で連携するなど、何らかのかたちで関係を強化していくこともできるはずである。

6. 結び

本稿では、少数言語であるバスク語による文学の翻訳を振興・普及するために過去 20 年ほどにわたって実施されてきた事業と政策について、分析と考察を行ってきた。

バスク語文学にとって、他の言語への翻訳は、国際的な認知を得て、他の文学に並ぶ威信を得るためばかりでなく、言語文化そのものの存続と発展を懸けたきわめて重要な課題と認識されてきたことは先述した。他の言語で新たな読者を得て、異なる文化との対話が生まれることはいかなる文学の発展にとって欠かせない。しかし、翻訳は少数言語文学にとって、外の世界への橋渡しとなるばかりでなく、隣接・併存する支配的言語の文化への吸収と言語文化的アイデンティティの希薄化をもたらしかねない危険性をも孕んだものでもある。ここまで追ってきたバスク語文学の翻訳振興政策の変遷は、その両面性を強く認識したうえで、政策や事業の立案と実行における専門性を高めることの重要性を示している。

また、とりわけ財政的・人的リソースの限られる少数言語の文脈においては、民間の専門家や団体との協力関係や密接な連携の有無が翻訳振興政策の方向性や実効性を大きく左右することも、バスク語文学の事例が与えてくれる示唆の一つであるが、その点においては、研究者の役割もまた欠かせないものであるだろう。この意味で、翻訳政策研究は、まだ歴史こそ浅いものの、今後より広くさまざまな観点から行なわれ、活発化していくことが望まれる。

29) ベルナルド・アチャガは Ute Körner、キルメン・ウリベは Pontas、カティシヤ・アグレやウシュエ・アルバルディといった近年台頭した女性作家たちは Ella Sher といった国際的な著作権エージェンシーと契約しているが、いずれも出版産業の盛んな国際都市バルセロナに所在する。

【参考文献】

- Aldekoa, Iñaki. (2004) *Historia de La Literatura Vasca*. Donostia: Erein.
- Astiz, Iñigo. (2013) “Euskal Letren nazioartekotzeak 25 urte,” I-IV, *Berria*, 2013/06/11-14.
<https://www.berria.eus/paperekoa/2420/036/001/2013-06-11/sehaska-kanta-baten-mapa.htm> [2022年9月27日アクセス]
- カザノヴァ, パスカル. (2002) 『世界文学空間』, 岩切正一郎訳, 藤原書店.
- Castro, Olga, & Laura Linares. (2021) “Translating the Literatures of Stateless Cultures in Spain: Translation Grants and Institutional Support at the Frankfurt Book Fair.” *Perspectives: Studies in Translation Theory and Practice*, 30 (5): 792-810.
- ダムロッシュ, デイヴィッド. (2011) 『世界文学とは何か』, 秋草俊一郎ほか訳, 国書刊行会.
- Dasilva, Xosé Manuel. (2009) “Autotraducirse En Galicia: ¿bilingüismo o Diglosia?” *Quaderns: Revista de Traducció*, 16: 143-56.
- Eizagirre Gesalaga, Xabier. (2012-2020) “Liburu behatokia.” *Jakin*, <https://www.jakin.eus/liburu-behatokia>. [2022年9月12日アクセス]
- Eusko Jaurlaritz. (2019) *VI Inkesta Soziolinguistikoa 2016*. Eusko Jaurlaritzaren Argitalpen Zerbitzu Nagusia, Vitoria-Gasteiz.
- Gabilondo, Joseba. (2016) *Before Babel: A History of Basque Literatures*. Barbaroak.
- González Núñez, Gabriel. (2016) “On Translation Policy.” *Target: International Journal of Translation Studies*, 28 (1): 87-109.
- 萩尾生. (2012) 「バスク語の存続・教育から対外普及へ—エチエパレ・インスティテュートをめぐる論点—」, 『ことばの世界』, 4号, 65-77.
- . (2019) 「問われているのは「地域」か「国家」か——自己決定権をめぐるバスクの動向を追う」, 奥野良知 (編著) 『地域から国民国家を問い直す』, 明石書店, 79-111.
- 萩尾生・長谷川信弥・塚原信行・柿原武史. (2015) 「越境する少数言語の射程—現代スペインにおける国家語と少数言語の対外普及政策—」, 『ことばと社会』, 17号, 112-159.
- Hagio, Sho. (2020) “External Projection of a ‘Minority Language’: Comparing Basque and Catalan with Spanish.” 『東京外国語大学論集』 *Area and Culture Studies*, 100: 43-64.
- Heilbron, Johan. (1999) “Towards a Sociology of Translation: Book Translations as a Cultural World System.” *European Journal of Social Theory*, 2: 429-444.
- Heilbron, Johan, & Gisèle Sapiro. (2007) “Outline for a Sociology of Translation: Current Issues and Future Prospects.” In Wolf, M., & A. Fukari (eds.), *Constructing a Sociology of Translation*, John Benjamins, 93-107.
- . (2018) “Politics of Translation: How States Shape Cultural Transfers.” In Roig-Sanz, D., & R. Meylaerts (eds.), *Literary Translation and Cultural Mediators in “Peripheral” Cultures*, Cham: Springer International Publishing, 183-208.
- Hertwig, Luise. (2020) “Studies in Book Culture State-Funded Support of International Trade in Rights and Translation Funding Programs of Guests of Honour Argentina and France at the 2010 and 2017 Frankfurt Book Fair.” *Mémoires Du Livre / Studies in Book Culture*, 11 (2): 1-38.
- Ibarluzea, Miren, & Mari Jose Olaziregi. (2016) “Autonomización y funciones del subcampo de la traducción literaria vasca contemporánea: una aproximación sociológica.” *Pasavento. Revista de Estudios Hispánicos*, IV (2): 293-313.
- Igartua, Iván, & Xabier Zabaltza. (2021) *Euskara. The Basque Language*. Donostia-San Sebastián: Etxepare

- Euskal Institutua.
- Loogus, Terje, & Luc van Doorslaer. (2021) "Assisting Translations in Border Crossing: An Analysis of the Tructa Translation Grants in Estonia." *Translation Spaces*, 10 (1): 161–80.
- McMartin, Jack. (2019) "A Small, Stateless Nation in the World Market for Book Translations: The Politics and Policies of the Flemish Literature Fund." *TTR: Traduction, Terminologie, Rédaction*, 32 (1): 145–75.
- Manterola, Elizabete. (2014a) *La literatura vasca traducida*. Bern: Peter Lang.
- . (2014b). "Una mirada hacia la traducción literaria del euskera al castellano." *Hermeneus. Revista de Traducción e Interpretación*, 16: 177–208.
- . (2016) "La traducción literaria en el País Vasco." In Galanes Santos, I. (ed.), *Traducción Literaria: Nuevas Investigaciones*, Granada: Comares, 178–203.
- Meylaerts, Reine. (2011) "Translation Policy." In Gambier, Y., & L. van Doorslaer (eds.), *Handbook of Translation Studies*. Vol. 2, 163–68. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Meylaerts, Reine & Gabriel González Núñez. (2018) "No Language Policy without Translation Policy: A Comparison of Flanders and Wales." *Language Problems & Language Planning*, 42 (2): 196–219.
- Montero Küpper, Silvia. (2016a) "Políticas para la traducción de textos literarios." In Galanes Santos, I. (ed.), *Traducción Literaria: Nuevas Investigaciones*, Granada: Comares, 53–72.
- . (2016b) "Situación de partida y análisis de las iniciativas de apoyo a la traducción en Galicia." In Luna Alonso, A. et al. (eds.), *Literaturas extranjeras y desarrollo cultural: hacia un cambio de paradigma en la traducción literaria gallega*, Bern: Peter Lang, 15–42.
- Olaziregi, Mari Jose. (2010) "Peripheral Being, Global Writing: The Location of Basque Literature." In Martín-Estudillo, L., & N. Spadaccini (eds.), *New Spain, New Literatures*, Nashville: Vanderbilt University Press, 27–42.
- . (ed.) (2012) *Basque Literary History*. Reno: Center for Basque Studies, University of Nevada, Reno.
- . (2015) "Internacionalización de la literatura vasca." In Salaburu, P., & B. Fernández (eds.), *Ibon Sarasola, gorazarre, homenatge, homenaje*, Bilbao: Universidad del País Vasco, 531–544.
- Pablo Núñez, Luis. 2017. "Las ayudas estatales a la traducción de obras españolas en lenguas extranjeras: balance de los años 2006–2011." *Itinerarios. Revista de Estudios Lingüísticos, Literarios, Históricos y Antropológicos*, 25: 167–91.
- Swann, Joan, et al. (2004) "Language Policy." In *A Dictionary of Sociolinguistics*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 174.
- Torrealdai, Joan Mari. (1997) *Euskal kultura gaur*. Donostia: Jakin.
- . (2007) *30 urte liburugintzan: 1976–2005*. Andoain: Jakin.
- Zaldua, Iban. (2012) *Ese idiomararo y poderoso: Once decisions cruciales que un escritor vasco está obligado a tomar*. Madrid: Lengua de Trapo.
- . (2017) "Pequeña, nueva, universal, colonial. La (extraña) Edad de Oro de la literatura vasca." *ctxt.es*, 2017/06/14. <http://ctxt.es/es/20170614/Culturas/13333/CTXT-Literatura-vasca-euskera-edad-de-oro-Iban-Zaldua.htm>. [2022年9月23日アクセス]
- Urquiza, Patricio. (ed.) (2000) *Historia de La Literatura Vasca*. Madrid: UNED.
- Vimr, Ondřej. (2022) "The Impact of Translation Subsidies on Publishing Decisions in Smaller European Countries." *Perspectives: Studies in Translation Theory and Practice*, 30 (5): 828–43.
- von Flotow, Luise. (2018) "Translation and Cultural Diplomacy." In Evans, J., & F. Fernandez (eds.), *The*

Routledge Handbook of Translation and Politics, London & New York: Routledge, 193–203.

Wolf, Michaela. (2014) “The Sociology of Translation and its ‘Activist Turn’.” In Angelelli, C. V. (ed.), *The Sociological Turn in Translation and Interpreting Studies*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 7–21.

【資料】

- Kultura Saila. (1997) AGINDUA, 1997ko ekainaren 5ekoa, *EHAA*, 1997-7-17, 114 ZK. [1997 年度エウスカデ
ィ賞バスク語文学部門の規定と公募に関する省令]
- . (2000a) AGINDUA, 2000ko uztailaren 17koa, *EHAA*, 2000-8-17, 157 ZK. [バスク書籍生産の国際
的振興のための助成の規定・公募に関する省令]
- . (2000b) AGINDUA, 2000ko irailaren 20koa, *EHAA*, 2000-9-22, 183 ZK. [バスク書籍生産の国際的
振興のための助成の規定・公募に関する省令の修正]
- . (2000c) EBAZPENA, 2000ko abenduaren 29koa, *EHAA*, 2001-2-5, 25 ZK. [バスク書籍生産の国際
的振興のための助成の公募選考結果]
- . (2001) AGINDUA, 2001eko apirilaren 24koa, *EHAA*, 2001-5-16, 92 ZK. [2001 年度バスク書籍生産
の国際的振興のための助成の実施方法に関する省令]
- . (2002) AGINDUA, 2002ko maiatzaren 23koa, *EHAA*, 2002-7-4, 104 ZK. [2002 年度バスク書籍生
産の国際的振興のための助成の実施方法に関する省令]
- . (2003a) AGINDUA, 2003ko uztailaren 24koa, *EHAA*, 2003-8-18, 204 ZK. [2003 年度バスク書籍生
産の国際的振興のための助成の規定・公募に関する省令]
- . (2003b) AGINDUA, 2003ko urriaren 8koa, *EHAA*, 2003-10-20, 204 ZK. [2003 年度バスク語での書
籍刊行およびバスク書籍の翻訳のための助成の実施方法に関する省令]
- . (2005) AGINDUA, 2005eko uztailaren 15koa, *EHAA*, 2005-9-5, 168 ZK. [2005 年度バスク書籍の
翻訳に関わる活動のための助成の実施方法に関する省令]
- . (2006a) EBAZPENA, 2006ko urtarrilaren 16koa, *EHAA*, 2006-2-10, 29 ZK. [2005 年度バスク書籍
の翻訳に関わる活動のための助成の公募選考結果]
- . (2006b) AGINDUA, 2006ko uztailaren 5koa, *EHAA*, 2006-7-19, 137 ZK. [2006 年度バスク書籍の
翻訳に関わる活動のための助成の実施方法に関する省令]
- . (2007a) EBAZPENA, 2007ko otsailaren 2koa, *EHAA*, 2007-3-9, 49 ZK. [2006 年度バスク書籍の翻
訳に関わる活動のための助成の選考結果]
- . (2007b) AGINDUA, 2007ko martxoaren 27koa, *EHAA*, 2007-4-25, 79 ZK. [2007 年度バスク書籍の
翻訳に関わる活動のための助成の実施方法・公募に関する省令]
- . (2008a) EBAZPENA, 2008ko otsailaren 4koa, *EHAA*, 2008-2-29, 43 ZK. [2007 年度バスク書籍の
翻訳に関わる活動のための助成の公募選考結果]
- . (2008b) AGINDUA, 2008ko urtarrilaren 14koa, *EHAA*, 2008-2-12, 30 ZK. [2008 年度バスク書籍の
翻訳に関わる活動のための助成の実施方法・公募に関する省令]
- . (2008c) EBAZPENA, 2008ko uztailaren 7koa, *EHAA*, 2008-8-13, 153 ZK. [2008 年度バスク書籍の
翻訳に関わる活動のための助成の公募選考結果]
- . (2009a) AGINDUA, 2009ko martxoaren 2koa, *EHAA*, 2009-3-23, 56 ZK. [2009 年度バスク書籍の
翻訳に関わる活動のための助成の実施方法・公募に関する省令]
- . (2009b) EBAZPENA, 2009ko uztailaren 28koa, *EHAA*, 2009-9-9, 173 ZK. [2009 年度バスク書籍の
翻訳に関わる活動のための助成の公募選考結果]

- . (2010a) AGINDUA, 2010eko martxoaren 10ekoa, *EHAA*, 2010-4-9, 65 ZK. [2010年度バスク書籍の翻訳に関わる活動のための助成の実施方法・公募に関する省令]
- . (2010b) EBAZPENA, 2010eko azaroaren 17koa, *EHAA*, 2010-12-24, 246 ZK. [2010年度バスク書籍の翻訳に関わる活動のための助成の公募選考結果]
- . (2011) AGINDUA, 2011ko otsailaren 2koa, *EHAA*, 2011-2-15, 31 ZK. [2011年度バスク書籍の翻訳に関わる活動のための助成の実施方法・公募に関する省令]
- Etxepare Euskal Institutua. (2012a) EBAZPENA, 2012ko martxoren 20koa, *EHAA*, 2012-4-16, 4 ZK. [2012年度文芸翻訳助成の実施方法に関する決定]
- . (2012b) EBAZPENA, 2012ko uztarrilaren 16koa, *EHAA*, 2012-8-21, 162 ZK. [2012年度文芸翻訳助成の公募選考結果（第一期）]
- . (2012c) EBAZPENA, 2012ko abenduaren 20koa, *EHAA*, 2013-2-7, 27 ZK. [2012年度文芸翻訳助成の公募選考結果（第二期）]
- . (2013-2022) “Literatura itzulpenak.” <https://www.etxepare.eus/eu/deialdiak-literatura-itzulpenak>. [2013～2022年度文芸翻訳助成の公募要項と選考結果] (2022年9月8日アクセス)
- . (2016-2021) “Urteko txostenak.” <https://www.etxepare.eus/eu/urteko-txostenak>. [2016～2021年度年次報告書] (2022年9月8日アクセス)